

アフロディーテのいる空間

牧草 泉

見つけた！ 見た！ 心臓が止まった
アフロディーテが見つめている
優しく 温かい 眼差しが 目の前に
目眩めく瞬間
時間のベクトルがゼロに収斂する
いつも心に抱いてきた
誰も知らない秘密
だいたいな だいたいな 宝物
悲しいときには
励ましてくれた
嬉しいときには
一緒に喜んでくれた

アフロディーテ
バラ科の落葉樹が 夕日に映える海が
そっと浮かび上がる
うれしくて そして 心は躍る
周囲が華やいでいる 弾んでいる
友人の「あんた、今日はなんだか変だよ」
という声も気にならない
変でもいいんだよ とても幸福なんだから
と 独りつぶやく
人生 こんなことも偶にはあるんだ
生まれてきてよかった
ミヒヤエル・エンデよ！
永遠の恋物語を描いて
スクリプトの隅っこでいいから
アフロディーテとの
出会うの場をつくってほしい

メアリー・マツカーシー伝説

男は振り返る
蜘蛛の糸のような痕跡が
過去を刻んでいる
ほどほどの大学を出て
それなりの会社に入り
営業から現場に配転され
営業と何度も衝突した
いくばくかの地位を経て
誰もが経験する窓際へ
社長の感謝の挨拶をあとに退職
それは
いつも予定されていた道

予測不能の人生を開拓した友人
波乱万丈の人生を送った友人

地獄の底から這い上がった友人
それに比して
なんと寂寥とした人生であったことか

男は思う 来世は女に生まれて
そうして 夕日に向かって大声で叫ぶ
「メアリー・マツカーシーのような
大胆な人生を歩くんだ！」
風がつぶやく
「そんなに劇的な人生ってないのよ」
でも 男には聞こえない
老いがそつと寄り添っている

美しい人

美しい人に出会った
英語ができて ××語もできて
彼女は夢追い人だった
駅のホームで彼女は言った
「あなたって一人で不幸がつているけど
私の背中を見たことあるの？」
彼女の背中には何も見えなかった
その横顔がとても素敵だった
「私の背中の荷物ってとっても重いんだよ」
そう言って彼女は車上の人となった

あの人はどんな軌跡を描いているのかな？
飛行機雲を見るたびに思い出す
一目でいいから会いたい
「あなた、しつかりするのよ」

あなたの背中の荷物ってちっちゃいのよ」
そんな彼女の励ましの言葉がほしい
「私は北斗七星にいるかもよ」
時々夜空を見てね」
と言って笑った彼女
でも
北斗七星は何も答えられない